



# Mold

## Mold

アート系／彫刻／塑像

石膏、鉄 H2004mm × W650mm × D400mm

造形芸術コース

**西岡 佑**

Nishioka tasuku

彫刻の制作過程で、石膏は別の素材で作品を完成させる途上の中間素材として扱われることがある。焼石膏に水を加えて混ぜ合わせると液状になり、数十分で硬化する。この性質を利用し、型（mold）に沿わせて石膏に形をもたせるが、型がなければ形が定まらない。人も同様に様々な要因に応じて自己を形成するが、何かになろうとする瞬間の人間は不安定さと表裏をなす可能性を秘めている。そうした人の姿を石膏を重ねて作品にした。

## 作品解説

立体作品を制作するうえで作品を粘土などの中間素材から展示できる素材に置き換える時、石膏型取りはよく行われる作業である。自分自身も作品を完成させるため何度も石膏型取りを行ってきた。石膏型取りは作業性が強く自分にとっては退屈なものであったが、作業の過程の1つである粘土の原型に石膏を振りかける作業を終えた状態（雌型 1 層目）がどうも魅力的な形に見え、卒業制作でその過程で生まれた形の魅力を生かした制作をしようと考えた。

制作するにあたって、石膏と人間の関係に注目することにした。石膏の性質と人間の性質に似たものを感じ、それを表現するにはどのようにするか試行錯誤を重ねた。

石膏を扱ってきて感じたことは型がないと、形を形成できないという受動的な性質があるということである。石膏は水を加えて混ぜ合わせることで化学反応を起こし、液状になる。それを型、あるいは粘土原型に流して数十分おくと硬化し、形が出来上がる。型や粘土原型がないままだと石膏は形を持つことができない。一方、人間も生まれた時代や場所などの外的環境、性別、信条などの様々な要因によってその内面的、外的な形を作り出していると思う。これらは石膏でいうところの型になっているのではないかと感じた。また、石膏は粘土→石膏→石のように別の素材で完成させるための中間素材として扱われることもある。石膏はさらに形や素材を変えられる可能性があることがわかる。人間も人生の中で様々な要因で何か別のものになろうとする力が働くものだと思う。そこで人体をモチーフに制作した作品に石膏型取りの作業の1つである雌型1層目を振りかけ石膏も人間も何かになろうとするその瞬間の魅力を作品にした。